

意地でも日刊

スペイン音楽の旅

2018.6.28 | vol.1
井上 鑑 Akira Inoue

第一号 成田からビルバオへ

バスクという言葉には不思議な魅力がある。美食のイメージも有りつつ素朴な文化の香り、そして何故か独特の男声合唱の響きが浮かび上がる。

「連歌・鳥の歌2016欧州ツアー」の思い出も未だに鮮やかなスペイン、今までも何度か訪れた国だけれども、バスク地方、ビルバオに行くのは初めてのことです。珍しく何も知らない街に行く微かな高揚感を感じる。

今回のツアーは福岡を基盤に音楽・文化交流ツアーを手がけている(株)TIC・KONZERTの提案で、音楽センターのスタッフの皆さんが主導して組んでくれた「平和のうた」を大きなテーマにした合唱関係の団体旅行。僕は旅行中に2回開催するコンサートのプログラミング、編曲、伴奏、演奏などを担当する立場で参加するのだ。では何故ビルバオ?と思われるだろうが、リアルタイムで思ったこと見つけたことを伝えて行きたい僕としては、予定や背景は「やがてわかる」状況のまま予測出来ない旅を共にして頂きたい訳である。

旅行の前にゆっくり寝られたことなど一度も無いのは個人的な欠陥なのか?それともみんな同じようなもので普通のことなのか?いずれにしても寝不足+早起き=自分で自分が心配、という状態で辿り着いた成田空港。最近羽田発着が増えてとみに遠く感じるの否めない。東京の玄関というイメージは薄くなってしまった。そんな現状を見ると、いったいあの国を挙げての混乱と暴力の応酬だった成田闘争とは何だったのか?と首をかしげてしまう。



成田の空は風の中 (写真:井上鑑)

パリ経由で向かう機内で印象的だったことは、隣の席に座った男性、中年と呼ぶには若干若い人だったが座った途端にiPadを取り出すと眠っていた時間以外ずっと(まあ僕も寝ていたのでもとは言えないが)録画されたテレビ番組を見続けていらしたことが。放送関係の方なのかもしれないが、大河ドラマ、Nスペ、食を取り上げたバラエティ番組、アニメ、と見続けていたのだ。11時間という異常な着座時間を退屈せずにいたい気持ちは重々わかるけれども、見ようと思わなくても目に入ってしまいう臨席の住人としては「それって時間計算して準備してきたんですか?」と質問したい気分を押さえるのに苦労するほど。他者が読んでいる本を覗き込むのはいかにも非礼のためらわれるが、テレビだと思えばぼんやり見てもなく眺めてしまいう自分にも驚いた。まあラーメン屋さんで壁に掛かっているテレビが11時間隣にあった、そんな気分です。パリまで着いたとは可笑しいと言えは可笑しい。かと思うと、反対側の臨席では英語国民の若い女性が同じくiPadで極小サイズフォントの論文(だと思う)を長時間添削していて時々コメントを電話のボイスメモに吹き込んでいます。あまりにも良く働いていらつしやるので「ああ、何か僕も仕事しなくちゃ」と機内で思うことは珍しいし、これもまた可笑しい。パリで乗り継ぐビルバオ行きの方が1時間強遅れて飛んだおかげで到着したら呆れるほど長いタクシー待ちの列に並ぶ羽目になった。ホテルのシャトルバスが23時30分までの運行なのに間に合わなかったのが理由、まあこれもまた取り立てて珍しき出来事でもない。で、ホテルは空港から直ぐなので待ち時間の10分の1にも満たない所要時間。そして僕は丸一日がかりで成田空港周辺の景色と見まがうような世界に辿り着いたのであった。